Rikkyo Psychological Research
2008, Vol. 50, 11-24

原　著

人格特性的自己効力感の形成に影響を及ぼす要因についての探索的検討 [1]

立教大学大学院現代心理学研究科　三好昭子

Factors effecting to the formation of generalized self-efficacy

Akiko Miyoshi (Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

The purpose of the present study was to examine the relation between Generalized Self-Efficacy (GSE), parenting styles and level of personality development[2] as defined in Erikson's Epigenetic Theory. A questionnaire was administered to 358 university students. The result showed that GSE correlated weakly with parenting styles, but strongly with outcomes related to the fourth stage developmental level (industry versus inferiority) on Erikson's scale, indicating a likely effect of this schooling stage on formation of GSE. Another result of the analysis by Structural Equation Modeling showed that while parenting styles did not directly affect formation of GSE, they did so indirectly through healthy early personality development. Study 2 consisted of interviews with 6 participants, selected on the basis of their GSE scores. The purpose was to examine in more depth the factors affecting formation of GSE. The results showed that there were negative effects on GSE from the following factors: (a) too high a level of aspiration, (b) basic mistrust caused by weak physical strength or unstable mood, (c) basic mistrust caused by bad parenting styles.

Key words : Generalized Self-Efficacy, parenting style, epigenetic theory, hope, competence

問題

Bandura (1977) は，行動の先行要因として予期機能（期待）を重視し，ある行動を自らが成功裏に実行できるという確信を自己効力感（self-efficacy）として概念化した。当初，課題や場面において特異的に行動に影響を及ぼす自己効力感が強調されていたが，後に，より一般的な自己効力感も重要であると指摘された（e. g., Bandura, 1989; Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs, & Rogers, 1982; Tipton & Worthington, 1984)。これは具体的な個々の課題や場面に依存せずに，より長期的に，より一般化した日常場面における行動に影響を与える自己効力感である。自己効力感をある種の人格特性的な認知傾向とみなしたものであり，人格特性的自己効力感（Generalized Self-Efficacy：以下GSEとする）と呼ばれている。つまりGSEの高い人は，特定の状況に限らず日常全般にわたって何かに取り組む際に一般的に「できる」と認知する傾向にあり，GSEの低い人は逆に「できない」と認知する傾向にあることを示している。

坂野（1989）はうつ病患者を対象として，抑うつ症状の変化に伴うGSEの変化を縦断的に検討した。その結果，入院中はGSEが低かったが，病状の回復・退院とともにGSEが上昇したことを明らかにした。そして，GSEは領域固有の自己効力感

[1] 本研究は2003年度立教大学学術推進特別重点資金の助成を得て行われた。

が般化したものであるため，抑うつ気分を改善するためには日常生活における様々な活動に対する自己効力感を高くすることが重要であると結論づけている（坂野，2002）。これは認知行動療法の基本的な考え方でもあり，領域固有の自己効力感の操作性をGSEの上昇へと発展的に応用したものとして評価されると考えられる。

しかしながら一方で，GSEは比較的安定しており，ドイツ統合による東ドイツから西ドイツへの移住というようなストレスフルな経験によっても変化しないことが示されている（Jerusalem & Mittag，1995 山本訳 1997）。Jerusalem & Mittag（1995 山本訳 1997，p.172）は，GSEが“思春期や青年期までに形づくられ，後の環境的な影響には左右されない”という可能性を示唆した。また三宅（2000）は，GSEの高い人はネガティブなフィードバック情報が与えられても，その後の領域固有の自己効力感や実際の課題遂行量に影響しないことを実験によって明らかにしている。さらに，ノルウェーの探検家ロアルト・アムンゼンは“南極を発見するや，かれは，数年もかけて，極度の失望落胆に抗しながら，北極の空を飛ぶことを計画しました。（Allport，1955 豊沢訳 1982，p.113）”というように，疲労，飢え，嘲笑，危険にもかかわらず探検活動を続け，ドイツの幻想文学作家ミヒャエル・エンデも“20才頃から10年余り，作家としては世間から全く認められなかった。（茂垣，2007，p.S38）”，そして金銭的にも困窮していたにもかかわらず書くことをやめなかった。このようにネガティブなフィードバック情報が実際の課題遂行量やGSEに影響を与えない事例の存在は多く，偉人伝に限らず，一般の人間の心理機制としても十分に了解可能であり，思春期・青年期までに形成されたGSEは人格特性として安定していることを傍証していると考えられる。

GSEが比較的安定しており変化しにくいのであれば，GSEがどのように形成されるのかを明らかにすることは重要である。しかしながらGSEの形成過程について，漸成発達理論のような人格発達理論からのアプローチを試みた研究は見当たらない。三好（2003）は客観的なレベルではなく主観的なレベルでGSEを測定するために，主観的な人格特性的自己効力感尺度（the Scale Measuring a Sense of Generalized Self-Efficacy：以下SMSGSEとする）を作成し，GSEと精神的健康との関連について，漸成発達理論における基本的信頼感を含めて検討する中で，本来領域固有の自己効力感という概念だったものを，GSEという人格のレベルにまで広げた時点で，人格発達理論を考慮する必要があったのではないかと指摘している（三好，印刷中）。人格形成という非常に複雑で漠然としたものを扱う場合，分析の枠組みとして，生涯発達を視野に入れた大きな分析視点をもつ漸成発達理論の果たす役割は大きいと考えられる。

漸成発達理論において“精神的活力の最も基本的な機能条件（Erikson，1968 岩瀬訳 1998，p.120）”のことをEriksonは基本的信頼感と呼び，第Ⅰ段階の発達主題とした。“‘信頼’とは，自分は自分自身を信頼できるのだという根本的な感覚，ならびに，他人も本質的には信頼してもよいのだという感覚を，意味するもの（Erikson，1968 岩瀬訳 1998，p.120）”である。したがって信頼は“自己自身と世界に対する一つの態度（Erikson，1959 小此木訳 1988，p.61）”であり，青年期には時間的展望として現れるとEriksonは述べている。さらにErikson（1964 鑪訳 1972）は内在的な固有の強さ，人格的強さを活力と呼び，漸成発達理論の8つの発達段階に対応させて8つの活力を挙げた。第Ⅰ段階の活力である希望が，それぞれの段階の危機に遭遇することによって最後の段階の知恵にまで生成されるとした。希望とは，“主要な願望は達成可能であるということを信じる永続的な先有傾向のこと（Erikson，1968 岩瀬訳 1998，p.134）”であるとEriksonは定義している。期待についての概念であるGSEは，第Ⅰ段階の基本的信頼感，時間的展望，希望といった概念と関連が強いことが予測される。

またEriksonは，学童期に相当する第Ⅳ段階生産性対劣等感において，物を生産することによって周囲の承認を獲得することを学び，生産性の観

念が発達し（Erikson, 1950 仁科訳 1995, p.333），青年期にはその葛藤が達成の期待（anticipation of achievement）・仕事見習い（apprenticeship）対労働麻痺（work paralysis）として現れると述べている。Eriksonは労働麻痺について“自分の全体的な能力に関する（基本的な不信感に退行した）深刻な不適合感の論理的な帰結である（Erikson, 1959 小此木訳 1988, p.191）”と定義し，それがいつも本当の潜在力の欠如を反映しているとは限らないと述べている。そしてEriksonは第Ⅳ段階における活力として有能感（competence）を挙げており，“重要な課題の達成において，機敏さや知性を自由に駆使する能力（Erikson, 1968 岩瀬訳 1998, p.163）”として定義づけ，“生産的な成人生活への協調的な参加にとって，恒久的な基礎となるもの（Erikson, 1968 岩瀬訳 1998, p.163）”であると述べている。Eriksonの第Ⅳ段階にかかわる概念の定義を考慮すると，青年のGSEは第Ⅳ段階の葛藤の青年期での現れである達成期待対労働麻痺とほぼ同義と解釈してよいのではないだろうか。したがって，GSEは初期の人格発達[2]によって強く影響されると考えられる。

GSEの形成過程について研究する上で欠かすことができないのは，GSEと家庭環境との関連についての研究だが，現時点ではほとんど見当たらない。Hoeltje, Zubrick, Silburn, & Garton（1996）は，GSEと家族の養育態度や適応の指標との関連を検討しており，養護的な親の態度（nurturance）とGSEは正の相関があり，拒否的な親の態度（rejection）とは負の相関があることを明らかにした。しかし人格発達という大きな枠組みからの考察がなされておらず，GSEと家族の養育態度との直接的な関連を検討しているだけである。

したがって本研究では研究1において，Eriksonの漸成発達理論を枠組みとして用い，GSEと青年の認知している家庭の雰囲気・養育者の養育態度との関連，および漸成発達理論における主題の解決程度との関連について検討する。また共分散構造分析により，養育環境と初期の人格発達という観点からGSEに影響を及ぼす要因モデルの検討を行う。研究2においては面接調査を実施し，Eriksonの漸成発達理論を枠組みとして，GSEに影響を及ぼす要因について探索的に検討する。

[2] 本研究では生涯発達を視野に入れた人格発達理論として知られているEriksonの漸成発達理論を枠組みとして用いている。したがって本研究における人格発達とは，Eriksonの漸成発達理論にける諸概念の発達を指す。

研究1

目的

GSEと青年の認知している家庭の雰囲気・養育者の養育態度との関連，およびEriksonの漸成発達理論における主題の解決程度との関連について検討する。また共分散構造分析により，養育環境と初期の人格発達という観点からGSEに影響を及ぼす要因モデルの検討を行う。養育環境がGSEに直接的に影響を及ぼすと同時に，人間の初期の人格発達に影響し，間接的にGSEに影響を及ぼすというモデルを検討する。すなわち養育環境が直接的にGSEに影響を及ぼすのか，それとも初期の人格発達を通じて間接的にGSEに影響を及ぼすのかについて検討する。

方法

対象者　首都圏4年制大学生358名（男性159名/女性198名/不明1名），平均年齢19.2歳（*SD* 2.15）。

手続き　2003年6月，大学での講義時間内に質問紙を配布し，集団実施した。

質問紙　質問紙は以下の4つの尺度から構成されている。(a) GSEを測定する尺度であるSMSGSE（三好，2003）は，Bandura（1977），坂野・東條（1986, 1993）の定義に従って項目が用意されており，信頼性・妥当性ともに十分に高いことが確認されている。逆転項目を変換した上で，全6項目の合計得点を算出した。得点の高いほどGSEが高いことを示している。(b) 青年が認知している養育者の養育態度を測定する尺度は，PBI（Parental Bonding Instrument : Parker, Tupling, & Brown, 1979）を日本語に翻訳したPBI日本版（小川，1991）が有名であるが，これはうつ病患者の

親の態度・行動の特徴を分類，整理し，最終的に養護因子と過保護因子に集約されたことに基づいて項目が作成されている。本研究では健康な人格発達を捉えることができるよう，新たに青年が認知している家庭の雰囲気・養育者の養育態度尺度を作成した。子どものパーソナリティー形成に影響を与える親の養育態度（村尾・尾形・増田，1979；詫摩・依田，1968）を参考に，ネガティブな11下位概念（支配的，かまいすぎ，甘やかし，服従的，無視，拒否的，残酷，専制的，両面性・矛盾性，条件つきの好意，家庭内不和）と，ポジティブな7下位概念（保護的・見守る，保護的・支える，民主的，受容，家庭内調和，一貫した態度，共感）につき，3項目ずつ合計54項目を用意した。同居している祖父母なども含めた養育環境としての家庭の雰囲気・養育者の養育態度に焦点を当て，中学生くらいまでの家庭の雰囲気と養育者が自分をどのように養育してきたかについての青年の認知を調べる尺度である。(c) Eriksonの漸成発達理論における最初の7段階の主題の解決程度を測定する尺度は，Erikson and Social-Desirability Items（Ochse & Plug, 1986）の日本語短縮版（S-ESDS）（三好・大野久・内島・若原・大野千里，2003）を用いた。S-ESDSは各段階につき7項目から成っており，信頼性・妥当性ともに十分に高いことが確認されている。逆転項目を変換した上で，各下位尺度において7項目の合計得点を算出した。得点の高いほど各段階の主題の解決程度が高いことを示している。

データ解析ソフト　分析にはSPSS for Windows ver.11.0J，およびAmos ver4を用いた。

結果と考察

青年が認知している家庭の雰囲気・養育者の養育態度尺度　まず（b）青年が認知している家庭の雰囲気・養育者の養育態度尺度全54項目について，主因子法を用いて探索的因子分析を行った。固有値の減衰状態および解釈可能性より3因子を抽出し，バリマックス回転をかけた。各因子に対する負荷量が大きく，かつ当該の因子以外への負荷量の低い項目を5項目ずつ採用した。採用した15項目について主因子法を用い3因子を抽出し，バリマックス回転をかけた結果をTable 1に示した。

第1因子は「家庭内の雰囲気は険悪だった」，「家族全体の関係がぎくしゃくしていた」といった項目からなる因子で，家庭内調和，不和に含ま

Table 1

青年が認知している家庭の雰囲気・養育者の養育態度尺度の因子分析結果

項目内容	F1	F2	F3	h^2
F1：家庭内調和				
36　家庭内の雰囲気は険悪だった。	.86	−.15	.20	.80
18　家族全体の関係がぎくしゃくしていた。	.83	−.11	.20	.74
29　家族はみんな仲が良かった。	−.76	.33	−.10	.70
11　明るい家庭だった。	−.73	.39	−.09	.69
54　うちではみんな，けんかばかりしていた。	.66	−.10	.24	.51
F2：あたたかさ				
40　私が落ち込んだときには，私を励まし支えた。	−.18	.82	−.12	.72
22　私が傷ついたときは，私をなぐさめようとした。	−.11	.80	−.07	.65
53　私の喜びや悲しみを共有してくれた。	−.21	.75	−.21	.65
35　私の成功を自分のことのように喜んだ。	−.16	.65	−.02	.45
17　私の小さな努力も認めてくれた。	−.17	.59	−.16	.40
F3：支配				
21　私が窮屈に感じるくらい干渉した。	.13	.01	.84	.72
19　何から何まで私を拘束した。	.26	−.13	.75	.64
3　いちいち細かいことで私に注意した。	.03	−.07	.66	.45
1　私を自分の思い通りにしようとした。	.16	−.13	.64	.45
34　私が期待に応えなければ，露骨に不機嫌になった。	.22	−.26	.55	.42
因子寄与	3.26	3.05	2.66	

れる項目である。家庭全体の雰囲気の善し悪しを測定している因子であり，分析しやすいように「家庭内調和」因子と命名した。第2因子は「私が落ち込んだときには，私を励まし支えた」，「私が傷ついたときは，私をなぐさめようとした」といった項目からなる因子で，主に保護的・支える，共感に含まれる項目であることから，あたたかい保護的な養育態度を測定している「あたたかさ」因子と考えられる。第3因子は「私が窮屈に感じるくらい干渉した」，「何から何まで私を拘束した」といった項目からなる因子で，支配的，かまいすぎ，条件付きの好意に含まれる項目であることから，過干渉で支配的な養育態度を測定している「支配」因子と考えられる。「家庭内調和」，「あたたかさ」，「支配」の各因子において，逆転項目を変換した上で，各5項目の合計得点を算出した。得点の高いほど，青年が認知している家庭の雰囲気・養育者の養育態度が，「家庭内調和」，「あたたかさ」，「支配」傾向の強いことを示している。各尺度得点の平均値・*SD*，および男女における

Table 2

各尺度における下位尺度得点の平均値・*SD*，および男女における平均値の差の検定，α係数

		全体（*N*＝358）		男性（*N*＝159）		女性（*N*＝198）			
		平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	*t* 値	α係数
GSE	5件法	3.29	.83	3.40	.85	3.20	.80	2.29*	.87
家庭内調和 [a]	5件法	3.85	.97	3.79	.96	3.90	.97	−1.10	.90
あたたかさ [a]	5件法	3.41	.82	3.28	.78	3.52	.85	−2.72**	.86
支配 [a]	5件法	2.58	.94	2.59	.90	2.57	.97	0.28	.84
第Ⅰ段階 [b]	4件法	2.49	.49	2.49	.51	2.49	.48	−0.08	.72
第Ⅱ段階 [b]	4件法	2.35	.57	2.38	.58	2.31	.56	1.24	.75
第Ⅲ段階 [b]	4件法	2.66	.57	2.78	.58	2.57	.54	3.55***	.76
第Ⅳ段階 [b]	4件法	2.60	.60	2.72	.61	2.51	.57	3.29**	.82
第Ⅴ段階 [b]	4件法	2.49	.57	2.50	.61	2.48	.53	0.39	.75
第Ⅵ段階 [b]	4件法	2.98	.60	2.91	.63	3.04	.56	−1.93	.79
第Ⅶ段階 [b]	4件法	2.50	.56	2.52	.56	2.49	.56	0.35	.73

注）平均値は各下位尺度の合計得点を項目数で除したものである。

***$p < .001$，**$p < .01$，*$p < .05$

[a] 青年が認知している養育者の養育態度尺度における下位尺度。

[b] Erikson and Social-Desirability Items（Ochse & Plug, 1986）の日本語短縮版（S-ESDS）（三好他，2003）における下位尺度。

Table 3

各下位尺度得点間の相関係数

	GSE	家庭内調和	あたたかさ	支配	第Ⅰ	第Ⅱ	第Ⅲ	第Ⅳ	第Ⅴ	第Ⅵ
家庭内調和 [a]	.14*	1.00								
あたたかさ [a]	.18**	.44***	1.00							
支配 [a]	−.07	−.39***	−.30***	1.00						
第Ⅰ段階 [b]	.58***	.20***	.33***	−.03	1.00					
第Ⅱ段階 [b]	.52***	.12*	.15**	−.10	.53***	1.00				
第Ⅲ段階 [b]	.61***	.05	.18***	.03	.45***	.49***	1.00			
第Ⅳ段階 [b]	.76***	.07	.15**	.01	.61***	.68***	.71***	1.00		
第Ⅴ段階 [b]	.52***	.18**	.21***	−.07	.63***	.66***	.46***	.67***	1.00	
第Ⅵ段階 [b]	.36***	.24***	.37***	−.22***	.55***	.46***	.36***	.45***	.65***	1.00
第Ⅶ段階 [b]	.54***	.18**	.28***	−.04	.70***	.44***	.48***	.59***	.59***	.55***

注）***$p < .001$，**$p < .01$，*$p < .05$

[a] 青年が認知している家庭の雰囲気・養育者の養育態度尺度における下位尺度。

[b] Erikson and Social-Desirability Items（Ochse & Plug, 1986）の日本語短縮版（S-ESDS）（三好他，2003）における下位尺度。

平均値の差の検定とα係数はTable 2に示した。

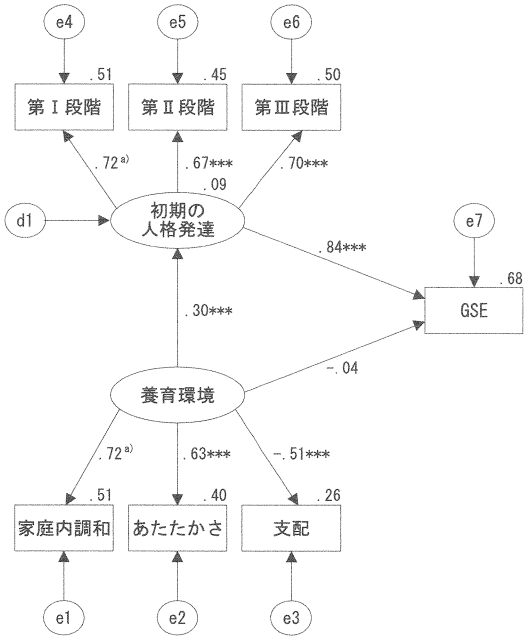
GSEと青年が認知している家庭の雰囲気・養育者の養育態度との関連　各下位尺度得点間の相関係数はTable 3に示した。GSEは「家庭内調和」とは$r=.14$（$p<.05$），「あたたかさ」とは$r=.18$（$p<.01$）というように弱い関連があり，「支配」とは関連がなかった（$r=-.07$，*ns*）。つまり「家庭内調和」といった家庭の雰囲気や養育者の「あたたかさ」ある養育態度は，GSEに弱い影響しか与えておらず，「支配」的な養育態度はGSEと関連のないことが示された。

GSEとEriksonの漸成発達理論における主題の解決程度との関連　GSEは，「第Ⅳ段階生産性対劣等感」ともっとも関連が強かった（$r=.76$，$p<.001$）。これは「問題」で述べたように，GSEの概念と第Ⅳ段階に関する概念の定義が類似していること，青年を対象とした場合，GSEと「達成の期待」がほぼ同義であると考えられることからも妥当な結果であるといえる。子どもたちは，学童期に相当する第Ⅳ段階において組織的な教育を受けるようになり，道具や技術を用いて物を生産することによって周囲の承認を獲得することを学び，生産性の観念が発達するとエリクソンは述べている（Erikson，1950 仁科訳 1995，p.333）。しかしこの段階において道具の世界に必要な自分の知識や技術に絶望すると，“自分は結局凡庸に生れついているのだ，或は不適格な人間なのだと考えるようになる（Erikson，1950 仁科訳 1995，p.334）”という。これらのことから，GSEは第Ⅳ段階の主題の解決程度に強く影響される可能性が示唆された。

またGSEはもっとも関連の強かった「第Ⅳ段階生産性対劣等感」を中心に，第Ⅴ～Ⅶ段階との関連（$r=.52$，$r=.36$，$r=.54$，いずれも$p<.001$）の強さに比べて第Ⅰ～Ⅲ段階との関連（$r=.58$，$r=.52$，$r=.61$，いずれも$p<.001$）の方が若干ではあるが強かった。これは，GSEが思春期や青年期までに形成され人格特性として定着するというJerusalem & Mittag（1995 山本訳 1997）の見解と矛盾しない結果であると考えられる。

GSEに影響を及ぼす要因モデルの検討　養育環境がGSEに直接的に影響を及ぼすと同時に，人間の初期の人格発達に影響し，間接的にGSEに影響を与えるというモデルについて共分散構造分析を用いて検討した（Figure 1参照）。第Ⅳ段階生産性対劣等感については第Ⅰ段階から第Ⅲ段階と並べて初期の人格発達に含めて検討することも可能だが，GSEとの概念の内容的類似性，実際の相関係数の高さ$r=.76$（$p<.001$）という観点から，GSEに影響を及ぼす要因モデルからは除外して検討した。その結果，GSEに影響を及ぼす要因モデルについて，十分な適合度が得られた（$GFI=.96$，$AGFI=.91$，$CFI=.93$）。

観測変数「家庭内調和」，「あたたかさ」，「支配」によって構成されている青年が認知している家庭の雰囲気・養育者の養育態度，すなわち「養育環境」は，「GSE」に直接的には影響を与えておらず（$\beta=-.04$，*ns.*），観測変数「第Ⅰ段階基本



注）標準化係数を示した。***$p<.001$
*e*1～*e*7，*d*1は誤差，観測変数と潜在変数の右肩の数値は決定係数（重相関係数の平方）。
a) モデルを識別させるために値1の固定母数に指定しているため，検定統計量および有意確率が算出されない。

Figure 1．GSEに影響を及ぼす要因モデル

的信頼感対不信」,「第Ⅱ段階自律性対恥・疑惑」,「第Ⅲ段階主導性対罪悪感」の解決程度によって構成されている「初期の人格発達」が「GSE」に強く影響を及ぼしている（$\beta = .84$, $p < .001$）。また「養育環境」が「初期の人格発達」に与える影響（$\beta = .30$, $p < .001$）を通じて間接的に「GSE」に及ぼしている効果は.25であり,「養育環境」から「GSE」への直接効果－.04を加算し,「養育環境」が「GSE」に与える影響の総合効果を求めると.21となった。つまり「GSE」は「養育環境」によって直接的に規定されるのではなく,健康な「初期の人格発達」,すなわち基本的信頼感を育む養育環境の中,基本的信頼感,自律性,主導性,生産性が優位に形成される中で人格特性として根づくのだと考えられる。

このモデルにおいて「GSE」の予測精度を評価する指標である決定係数は.68だった。本研究では「養育環境」と「初期の人格発達」のみから「GSE」を予測するモデルを検討したが,今後は本研究で得られた知見をモデルに組み込むことによって,「GSE」の予測精度をさらに上げることができると考えられる。

研究2

目的

Eriksonの漸成発達理論を枠組みとした面接調査を実施し,GSEに影響を及ぼす要因について広く探索的に検討する。

方法

協力者　研究1においてSMSGSE（三好,2003）得点の偏差値が60以上だったGSE高群（H）2名,50前後だった中群（M）1名,40以下だった低群（L）3名に面接への協力を依頼した。

手続き　2003年11～12月,面接室において個別に守秘義務についての説明をした上で約90分にわたる半構造化面接を実施した。協力者に了解を得て,その内容をテープレコーダーに記録し,後にそのテープを起こした。

質問内容　大野（1981）の用いたアイデンティティおよび全生活空間（西平,1973）に関する半構造化された面接を改変して行った。質問は全生活空間にわたる様子・気分,GSEの概念,漸成発達理論における第Ⅰ段階と第Ⅳ段階に関する諸概念,生育史など包括的な内容とした。

結果と考察

面接協力者の属性,およびGSEと能力に対する回答内容はTable 4とTable 5に示した。その結果,GSE高群低群にかかわらず,過去において能力はあると認識していたことがわかった。「スーパー小学生…何でもできる方」(052H),「やればできるんだな」(024H),「自分が何かをやりたいと思ったら実現させることはできるんだって,漠然と思ってました」(035M),「ちょくちょくは,何かちっちゃいことで（能力があると感じたことは）あった」(098L),「【考え方,審美眼,感性,理知性というようなこと】そういうところは,…多少違うところはある【優越感の意を含む】かなと思います」(008L),「全能感に近い…オールマイティな感じ」(101L)。また劣等感についてもGSE高群低群にかかわらず,過去において感じたことがあると回答している。それにもかかわらず,なぜGSE中群や低群はGSEが高く形成されなかったのだろうか。

この観点から面接記録を分析した結果,原因として次の3点が挙げられた。養育環境と基本的信頼感（対自的信頼感・対他的信頼感),時間的展望についての回答内容はTable 6に示した。

1．周囲の人の要求水準の高さ　「お前はダメなんだ,って言われることが多かったから,だんだんと自信がない子になっていったかなって感じ」(Table 5の「GSE」098L),「親が親なんで,お前はもうダメだ,とか,死ね,とか,そんな感じだったんで,劣等意識ばっかりもってるような子でしたからね。…自分はダメな,というか,人より劣った劣等人種なんだなぁと思うようになった」(Table 5の「過去の能力に対する認識」098L)というように,能力があると感じることもあったが,養育者や教育者の評価によって「やっぱり結局,全体で見たら負けてんだ」(Table 5の「過去の能力に対する認識」098L)と思うようにな

り，その結果GSEが低く形成される可能性が示唆された。これは，自己効力感を高める方法として坂野（2002）が“正の強化を受ける機会をふやす（坂野，2002，p.79）”ということを挙げ，“治療者のみならず，患者の回りにいる人すべてが，患者の振る舞いに対して注目を与え，正のフィードバックを与えることがたいせつである。（坂野，2002，p.79）”と述べていることと符合している。

Table 4

面接協力者の属性，およびGSEと能力に対する回答内容

		GSE	過去の能力に対する認識	劣等感	現在の能力に対する認識
052H	21 男性 63.28 62.74	「人並み以上に，こなせたりはあると思うけど，やっぱりできないこともあるから，…何でもできるってことはない」，「好きなことに対して，…すごい必死に全力を出したり力を注ぐっていうのでは負けてないと思うから，そういう点では自信はあります。」	「中学のときとか，小学校のときは，自分はスーパー小学生，っていうか，なんで周りはこんなにできないんだろうとか，自分なんでもできるんじゃないかとか思ったり，走るんもこのときとか，陸上でもいい成績だったから，そういうんもあったし…何でもできる方だった」	「【部活で陸上をやっていたときに，記録がのびなかったとき】あぁ自分は本当はそういう走る才能がないんじゃないかとか，…【中学のときは勉強が出来たのに，高校でつまづき】ほんとは自分はそんなに能力がないんじゃないかって思ったときはありました。」	「能力があったらチャレンジするだろうし，能力がなくてリスクを背負うことになっても，行ってしまいそうなくらいのときは多い」
024H	20 女性 61.03 56.83	「【仕事に関しても】今ならまだ間に合うかな，っていう気持ちはあります。…いろいろ失敗とかを重ねていくうちに，できるようになるかなとは思います。」，「絶対的にできないものっていうのに，あまり出会ったことがないせいもあると思うんですけど，…できるようになるんじゃないかなって思うことが多い」	「テストととかがあるときに，ちゃんと勉強してれば，そのぶん，ちゃんとできるじゃないですか。で，それで結果がよかったときに，やっぱりやればできるんだなって自分で思ったりとか，そういうことはけっこうありますね。」	「【高校では習熟度別クラスになり，英語で】文系の一番下になってしまって，そのときはすごい落ち込みましたね。…やっぱり，成績でクラス分けっていうので，下の方になっちゃったのは，けっこうショックでしたね。…【テストで平均値より下だと】わりと落ち込んでた気がします。」	「リスクがあっても本当にやりたいことだったら，自分でできる限りそれがうまくいくように，できる限りの努力はすると思う」，「努力が，その能力にある程度は結びつくかなとは思います。」
035M	19 女性 52.05 50.93	「できないことがいっぱいあります。…まず就職できるかどうかが，すごく自信がない状況なので，だからできないことが多いですね。…【就職のことだけでなく】ましてや他のいろんなことなんて。」，「頑張ればそんなにできないことって多くないと思います。…たいてい道は開けてる…立ち直りが早いのと，…やろうと思って出来たことがけっこうある」	「高校のときとかは，けっこう，調子に乗ってたかも。…自分が何かをやりたいと思ったら実現させることはできるんだって，漠然と思ってましたね。」	「【小学校5年生のとき，人間関係が複雑で】そういうのが分からない自分がダメだ，みたいな。…【計算や漢字が】できないから，やっぱり劣等感みたいなのはありましたね。」	「どうでしょうね。（能力は）なくてもがんばればなんとかなる，これからなんとかしようって，いつも思ってます。」

注）面接協力者番号の右に，GSE高群はH，中群はMと表記している。
面接協力者の属性は，上から，年齢，性別，GSE・基本的信頼感の偏差値を示している。
「GSE」は，「漠然と，自分は何でもできるような気がしますか。」，「あなたは大抵のことなら何でもできると思いますか。」，「自分に自信はありますか。」という質問への回答とその根拠をまとめたものである。
（　）内は言葉の意味を明確にするために補った部分，【　】内は面接協力者の言葉を要約した部分である。

Table 5

面接協力者の属性，およびGSEと能力に対する回答内容（続き）

		GSE	過去の能力に対する認識	劣等感	現在の能力に対する認識
098L	24 男性 38.57 30.26	「頑張れば何でもできる！と思いたいけど，1回社会に出てみると本当に自分が何にもできないんだな，というのは，痛感したから，って感じなんで，現実にはやっぱぜんぜん何も役に立ってない，何もできないんだと，いうのは知ってるんだけど，頭の中ではまだ，頑張れば何とかなるんじゃないかな，とか，そんな風な，なんか甘い考えをもってるかもしれないですね。」，「正直やっぱり，自信がないところが大きいかな…お前はダメなんだ，って言われることが多かったから，だんだんと自信がない子になっていったかなって感じ」	「ちょくちょくは，何かちっちゃいことで（能力があると感じたことは）あったけど，基本的には劣等意識ばっかりだったかな。ちっちゃい頃から，もう，親が親なんで，お前はもうダメだ，とか，死ね，とか，そんな感じだったんで，劣等意識ばっかりもってるような子でしたからね。…自分はダメな，というか，人より劣った劣等人種なんだなぁと思うようになったというか。…【学校の授業は簡単だったが】塾では…ダメだお前なんかはって。…俺はやっぱり，結局全体で見たら負けてんだ，とか。負けの方にけっこう，集中してた気がします。」	「（劣等感を）高校をやめた頃から，もう，はい，感じてました。やっぱり，友だちからは何でやめちゃったの？とか，きかれるし，このころって，みんな大学入ってたんで，自分だけが一人で働いて，ま，将来もねぇと。で，その，中学の友だちっていうのは，やっぱみんな金持ちだから，みんないい大学に行って，ぜんぜん生活が違っちゃって，これからどうなるんだろうって感じで。」	「上には上がいるかなっていう現実もあるんで，…やりたいことがある程度はできるっていうのはあるけど，特別に，この世で一番になるとか，そういうのはないと思います，そういう才能は。」
008L	22 男性 36.33 39.11	「ある程度のことは，努力すれば，それなりのところまではいけるのではないかなとは，ま，あくまで努力すればの話ですが。」，「出来ることもいっぱいあると思いますし，出来ないこともそれと同じ数だけあるんじゃないですかね。」，「こうして生まれたわけですから，希望として自分は自信があると言いたいです。」	「【考え方，審美眼，感性，理知性というようなこと】そういうところは，…多少違うところはあるかなと思います。…はっきりとそれを個性かなと思ったのは，最近くらいですかね。…【中学くらいから】変わってんのかな，他人とは違うというか，優越感かは分からないですけど。」	「（劣等感は）あります，普段から。普段からです。劣等感の固まりですから。ほんとに。特に就活してるときとか…出来る人はほんとに出来ますからね。」	「いや，（能力は）ないですね。残念ながら。…やりたいことをやるだけの能力はやはり，さすがにないなと思いますね。…【理由は】実際に，考えがまとまらないということと，その能力のないのがネックですね。」
101L	19 男性 31.83 30.26	「限られた範囲でだけ，漠然とした，その全能感というと言い過ぎですけど，何でもできる感覚はあると思います。…すごい偏ってる気がしますね，能力が。…【日常的には】一応，何とかやっていくだけの能力は足りてるなって気はします。」，「自信は，これまで何とかやってきたし，そういう意味でいっちゃぁ，これからも何とかなるかな，って思わなくもないです。」	「中学の頃はかなり舞い上がってましたね。…ある意味，全能感に近いのかな。中学のときは，オールマイティな感じで，その頃通ってた高校受験の塾も，中1中2くらいの頃は，塾全体の上位者として掲載されることがわりとあったり」	「小学校のころの，中学受験用の進学塾っていうのが一番ですかね。…【塾での劣等感というのは】前提として，ダメだってことがあって，で，やる気がないから，これはもう，とりあえずいるだけしかないな，って感じで。」	「ある程度あると思ってますけど，今まだ，そのはじめて，助走が終わったくらいで，本当にその才能があるかどうかってのは，これから3年，4年とやっていく中で，自分に対しても証明しなきゃいけないのかなって。…もしかしたら，ずっと分からないかもしれませんけど。」

注）面接協力者番号の右に，GSE低群はLと表記している。
面接協力者の属性は，上から，年齢，性別，GSE・基本的信頼感の偏差値を示している。
「GSE」は，「漠然と，自分は何でもできるような気がしますか。」，「あなたは大抵のことなら何でもできると思いますか。」，「自分に自信はありますか。」という質問への回答とその根拠をまとめたものである。

Table 6

養育環境と 基本的信頼感（対自的信頼感・対他的信頼感），時間的展望についての回答内容

	家庭の雰囲気	父親	母親	自分自身に対する信頼	他人に対する信頼	時間的展望
052H	「明るいと思います。かなり明るいと思います。」	「明るいし，すごい気さくな人やけど，怒るとすごい怖い…田舎の頑固親父みたい…【深い話になると意見が食い違い】よくぶつかります。」	「友だちみたいな，姉ちゃんみたいな人…【父親との間に入って】よく話をきいてくれる…冷静に話せる」	「自分のことは信頼してます。」	「自分がほんとに一番仲がいいって思ってて，向こうも自分のことほんとに一番仲がいいって思ってくれてるなら，なんていうか，信頼できる」	「明るい，ようにしたいっすね。その方が楽しいじゃないですか。」
024H	「私の家は，わりと家族みんな仲がいい…いつも賑やかな感じ」	「わりとやさしいので，やさしいというか，ときどき甘いので，つい，それにのっかってしまう。」	「すごく仲がよくて，【演劇や買い物にも一緒に出かけたり】，…かなり仲がいいほうだと思います。」	「ポジティブな感じなときだと，信頼してる…自分によくないことが起こったときとか，それに対処する自分みたいなのは，あまり，信頼してない」	「基本的には，そうだ（他人は信頼できる）と思います。」	「何となく，まだ不透明な感じ…どちらにも転がる可能性があるかな，と思います。」
035M	「【両親と弟が勉強していて】私ひとりで遊んでたりしてますね。なんか独特な空気」	「やさしそうなんだけど，頑固な人…なんか濁しながらも自分の思い通りにしてる人ですね。…やっぱ（好きなのは）やさしいからかな。」	「すごい勉強熱心で，…ちゃんとした人ですね。…（仲は）いいですね，なんかぜんぜん性格が違うと思うんですけど」	「信頼してないですね…ほんとに気分屋なんで。…あと体力もちょっとない…あんまり自分を信用しすぎると失敗します。」	「基本的に，根本的には信頼できるというか，信頼しなきゃちょっと，自分が大変かな，みたいな」	「紙一重ですね。でも明るいと思っていけば明るくなると思うんで，明るいと思います。」
098L	「基本的に，しゃべらない感じですかね。会話がない。【いっしょにご飯は食べるが】あまり会話がないというか，みんな無口，基本的に。」	「基本的におこんないから，そんな怖くない…未だに理解できない…どういう頭の構造してんだか，ぜんぜんわかんないですね。感情を表に出さない人」	「あまり理性的になったとこを見たことがない…常に，感情に流されてるような感じ…母親に対しては，やっぱりちょっと，ちょっと怨んでる」，	「つい最近まではほんとに，自分が嫌いだなっていうような感じだったけど，最近はまぁ，なんとか自分で考えて，少しは（信頼）できるようになったかなって思うんですけど。」	「【以前は自分が世間に虐げられていると思っており，人間なんて結局自分のことしか考えてないと思っていたから】ほんとに人信じられなかった…だけど，最近はちょっとわかんなくなってきた」	「あんまり楽観主義者な方じゃないんで，どちらかというと不安だなぁって感じがある」が，「なるようにしかならねぇんだろうな，って気もします。」
008L	「老人がいますけど，老人も若い人たちも，…家族の一員として，こう一丸としてまぁ，仲良くやってる」	「仕事とか，やるべきことはきちんとやるというタイプ…【父親とは】気恥ずかしいというか，何を話していいのか，父親も無口な方なんで」	「だらしがないですけど，…社交性とか，何て言うんですか，対人関係といいますか，そういうのはしっかりやっていますね。」	「信頼ある程度してます。…一応，失敗するにせよ，一生懸命やる，ということ」	「（他人は信頼）できますよ。できると思います。たいていの人はですね，いい人ですから。」	「いやもう，バラ色ですね。たぶん，苦労はするでしょう。…それでもまぁ，何とかやっていくんじゃないでしょうか。」
101L	「呑気で，だから，本来ならせっぱつまっていいところを，せっぱつまってない，って感じです。」	「あんまりしっかりした人じゃない…雰囲気としては厳格な感じがある…【が，やることやってない】…【中学受験をめぐって】小5の頃に僕が勘当されて，…【以後】会ってません。」	「子どもっぽい感じ…優秀…ちゃんと僕らを育ててるなっていう感じがして，それがすごいな，って思います。…【入院時】大事にされてるな」と実感。	「あんまり（信頼）してません。【理由は】何か，ころころ，その，気分が変わるせいで，価値観まで変わる感じで（自分自身を信頼できない）」。	「あんまり（信頼）できませんね。…ほんとは信頼できない人たちの中から，信頼できる一部の人とつき合う，みたいな，そういう感じです。」	「今，わりといろんなことやって，うまくやってる，うまくいってるのかなって感じなんで，その延長として明るいかな，って感じですね。」

2．体力的な弱さ・健康状態や気分の変調による基本的不信頼感　「体力もちょっとない…あんまり自分を信用しすぎると失敗します。」(035M) というように，体力的な弱さや健康状態によって自分自身を信頼できないということが，GSEを低めている可能性が示唆された。また「気分屋」(035M)，「ころころ，その，気分が変わるせいで，価値観まで変わる感じで（自分自身を信頼できない)」(101L) というように，自分の意志で制御できない気分の変調は，自分自身を信頼できないことへつながり，GSEを低める要因になると考えられる。

3．養育環境による基本的不信感　「いい点取れないと，すごい怒って，で，逆にいい点取ると気持ち悪いくらい甘くなったりして，すごく，なんか，ちぐはぐな対応だったから，やっぱり，怖いじゃないですか。で，まぁ，成績落ちたら飯食わしてくんなかったり，はたいたり，無視したり，っていうのが，けっこう頻繁にあって，何だか，とても。その辺に，ちょっと人が怖くなった理由があるのかなって気はする」(098Lの面接記録からの引用) というように，2．体力的な弱さ・健康状態や気分の変調によるものではなく，養育環境による基本的不信頼感から，その後の人格発達において自律性や主導性が発達しにくく，GSEを低める要因になる可能性が示唆された。どんな子どもでしたかという質問に対してGSE高群である052Hは「リーダーシップ」，「活発で，前に前に出たがる感じ」(052Hの面接記録からの引用)，024Hは「仕切り屋」，「ずんずん進んでいくタイプ」，「班長タイプ」(024Hの面接記録からの引用) と回答したのに対し，GSE中群や低群においてはこの種の回答がなかった。GSE高群は基本的信頼感を基盤にして，自分の意志で，ある目的に向かって失敗を恐れずに主導性を発揮しながら生産性の観念を発達させ，高いGSEを形成してきたことが示唆された。

全体的討論と今後の展望

本研究では研究1においてGSEと青年の認知している家庭の雰囲気・養育者の養育態度との関連，およびEriksonの漸成発達理論における主題の解決程度との関連について検討した。その結果，GSEと家庭内調和といった家庭の雰囲気や養育者のあたたかい養育態度とは弱い関連しかなく，支配的な養育態度とは関連のないことが明らかになった。そしてGSEは第Ⅳ段階生産性対劣等感という主題の解決程度ともっとも関連が強く，学童期である第Ⅳ段階の危機がGSEに強く影響を及ぼす可能性が示唆された。さらに共分散構造分析によって，養育環境が直接的にGSEに影響を与えると同時に，第Ⅰ段階から第Ⅲ段階という初期の人格発達を通して間接的にGSEに影響を及ぼすというモデルの検討を行った。その結果GSEは，養育環境によって直接的に規定されるのではなく，健康な初期の人格発達，すなわち基本的信頼感を育む養育環境の中，基本的信頼感，自律性，主導性が優位に形成される中で人格特性として根づくことが分かった。研究2においてGSEに影響を及ぼす要因について広く探索的に検討した結果，(a) 周囲の人の要求水準の高さ，(b) 体力的な弱さ・健康状態や気分の変調を原因とする基本的不信頼感，(c) 養育環境を原因とする基本的不信頼感が挙げられた。

(a) 周囲の人の要求水準の高さに関して論理的に広げて考えてみると，周囲の人だけでなく自分自身の要求水準も高い場合もあり得る。Eriksonは第Ⅳ段階劣等感の青年期での現れである労働麻痺について，いつも本当の能力の欠如を反映しているとは限らないとし，“全能や全知をひたすら確立しようとする自我理念からの非現実的な要求を伝えている場合 (Erikson, 1959 小此木訳 1988, p.191)” があると述べている。Adlerも“神のようになりたい (Adler, 1931 高尾訳 1991, p.69)” という目標が，“独特に強い優越目標 (Adler, 1931 高尾訳 1991, p.70)” であり危険だと述べているし，Horneyもまた，神経症的人間は想像力を用いて理想化された自己像を作り上げ，理想化され統合された自己像に己自身を同一視するとし，“理想化された自己を現実化しようとする諸欲動

のうちで，完璧さへの欲求はもっとも根本的なものである。その目標は，パーソナリティ全体を理想化された自己に作りかえようとすることにほかならない。(Horney，1950 榎本・丹治訳 1998，p.11)”と説明している。すなわち，「全能や全知を確立しようとする要求」，「神のようになりたいという目標」，「完璧さへの欲求」という極端な要求水準の高さは，人間にネガティブな影響を及ぼすというのである。なぜ極端な要求水準の高さをもつに至るのかという観点からの研究は，GSE形成と健康な人格発達との関連を明らかにする上で重要なポイントとなると考えられる。

本研究における面接協力者は過去も含めると，GSEの高低にかかわらず能力があるという感覚や万能感をもっていたことが明らかとなった。首都圏4年制大学生6名という限定された少ない人数であるため，過度に一般化し，人間は皆，現在のGSEの高低にかかわらず能力があるという感覚や万能感をもった経験があると結論づけることはできない。しかし本研究では，能力があるという感覚や万能感をもった経験があるということは同じであるにもかかわらず，なぜGSEの高い人と低い人が存在するのかという観点から分析し，今後のGSE形成に関する研究の展開にとって具体的な手がかりを得ることができた。

今後は調査の対象者を広げ，GSEに影響を及ぼす要因モデルに本研究で得られた新たな知見，すなわち学童期における能力の認知，周囲の人や自分自身の要求水準，体力などを組み込むことによって，GSEに関してより精度のよい予測が可能になると考えられる。

謝辞

本研究をまとめるにあたりご指導いただきました立教大学大野久教授，貴重なご助言をいただきました西平直喜先生に厚く御礼申し上げます。また，調査にご協力くださいました学生の皆様に心から感謝いたします。

引用文献

Adler, A. (1931). *What life should mean to you.* Boston: Little & Brown.
(アドラー，A.　高尾利数 (訳) (1991).　人生の意味の心理学　春秋社)

Allport, G.W. (1955). *Becoming: Basic considerations for a psychology of personality.* New Haven:Yale University Press.
(オルポート，G. W.　豊沢　登 (訳) (1982).　人間の形成――人格心理学のための基礎的考察――　理想社)

Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.

Bandura, A. (1989). Human agency in social cognitive theory. *American Psychologist*, **44**, 1175-1184.

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society.* New York: Norton.
(エリクソン，E. H.　仁科弥生 (訳) (1995).　幼児期と社会　みすず書房)

Erikson, E. H. (1959). *Identity and life cycle.* New York: International Universities Press.
(エリクソン，E. H.　小此木啓吾 (訳) (1988).　自我同一性　誠信書房)

Erikson, E. H. (1964). *Insight and responsibility.* New York: Norton.
(エリクソン，E. H.　鑪幹八郎 (訳) (1972).　洞察と責任　誠信書房)

Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis.* New York: Norton.
(エリクソン，E. H.　岩瀬庸理 (訳) (1998).　アイデンティティ　金沢文庫)

Hoeltje, C. O., Zubrick, S. R., Silburn, S. R., & Garton, A. F. (1996). Generalized self-efficacy: Family and adjustment correlates. *Journal of Clinical Child Psychology*, **25**, 446-453.

Horney, K. (1950). *Neurosis and human growth: The struggle toward self-realization.* New York: Norton.

(ホーナイ, K.　榎本　譲・丹治竜郎 (訳) (1998).　神経症と人間の成長　誠信書房)

Jerusalem, M., & Mittag, W. (1995). Self-efficacy in stressful life transition. In A. Bandura (Ed.), *Self-efficacy in changing societies.* Cambridge: Cambridge University Press. pp.177-201.
(イエルサレム, M., & ミッタグ, W.　山本多喜司 (訳) (1997).　ストレスフルな人生移行における自己効力　本明　寛・野口京子 (監訳)　激動社会の中の自己効力　金子書房　pp.154-178.)

三宅幹子 (2000). 特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容に与える影響――課題成績のフィードバック操作を用いて――　教育心理学研究, **48**, 42-51.
(Miyake, M. (2000). Relation of generalized self-efficacy to changes in task-specific self-efficacy. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **48**, 42-51.)

三好昭子 (2003). 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度 (SMSGSE) の開発　発達心理学研究, **14**, 172-179.
(Miyoshi, A. (2003). Development of a generalized self-efficacy measure. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **14**, 172-179.)

三好昭子 (印刷中). 人格特性的自己効力感と精神的健康との関連――漸成発達理論における基本的信頼感からの検討――　青年心理学研究
(Miyoshi, A. (in press). The relationship between generalized self-efficacy and mental health: Viewed in light of the concept of basic trust as expressed in epigenetic theory (Erikson, 1950). *Japanese Journal of Adolescent Psychology.*)

三好昭子・大野　久・内島香絵・若原まどか・大野千里 (2003). Ochse & Plugの Erikson and Social-Desirability Scaleの日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み　立教大学心理学研究, **45**, 65-76.
(Miyoshi, A., Ono, H., Uchijima, K., Wakahara, M., & Ono, C. (2003). The development of a simplified version of Ochse & Plug's Erikson and social-desirability scale (S-ESDS). *Rikkyo Psychological Research*, **45**, 65-76.)

茂垣まどか (2007). ミヒャエル・エンデの自我に内在する回復力　日本教育心理学会第49回総会発表論文集, s38-39.
(Mogaki, M)

村尾成允・尾形　健・増田直衛　(1979).　新心理学　関東出版社 pp.31.
(Murao, N., Ogata, T., & Masuda, N.)

西平直喜 (1973). 青年心理学　共立出版
(Nishihira, N.)

Ochse, R., & Plug, C. (1986). Cross-cultural investigation of the validity of Erikson's theory of personality development. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1240-1252.

小川雅美 (1991). PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究　精神科治療学, **6**, 1193-1201.
(Ogawa, M. (1991). Reliability and validity of the version of PBI. *Japanese Journal of Psychiatric Treatment*, **6**, 1193-1201.)

大野　久 (1981). 現代青年の充実感に関する研究 (2) 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 456-457.
(Ono, H.)

Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, **52**, 1-10.

坂野雄二 (1989). 一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討　早稲田大学人間科学研究, **2**, 91-98.
(Sakano, Y. (1989). Verification of validity of general self-efficacy scale (GSES). *Waseda Journal of Human Sciences*, **2**, 91-98.)

坂野雄二 (2002). 抑うつ気分の解消　坂野雄二・前田基成 (編著)　セルフ・エフィカシーの臨床心理学　北大路書房　pp.72-81.
(Sakano, Y.)

坂野雄二・東條光彦 (1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度 作成の試み　行動療法研究, **12,** 73-82.
(Sakano, Y., & Tohjoh, M. (1986). The general self-efficacy scale (GSES) : Scale development and validation. *Japanese Journal of Behavior Therapy*, **12,** 73-82.)

坂野雄二・東條光彦 (1993). セルフ・エフィカシー尺度　上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック 西村書店 pp.478-489.
(Sakano, Y., & Tohjoh, M.)

Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W. (1982). The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, **51**, 663-671.

詫摩武俊・依田　明 (1968). 性格　大日本図書
(Takuma, T., & Yoda, A.)

Tipton, R. M., & Worthington, E. L. (1984). The measurement of generalized self-efficacy: A study of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 545-548.